

2024 年度Ⅰ期 グループ企画

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	○・A	マヒドン大学看護学部	タイ	2024/8/13～8/23
2	○・M			

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部保健学科看護学専攻4年	学籍番号：*****	氏名：O・A
----------------	------------	--------

渡航先国：タイ
受入機関名：マヒドン大学ラマティボディ看護学部
渡航先機関での受入期間： 令和6年8月13日～令和6年8月23日（11日間）

1. スケジュール

8月13日(火)	Welcome Ceremony Ramathibodi School of Nursing の紹介 タイの医療制度について講義 International Relations チームによるプレゼンテーション
8月14日(水)	病院見学@ラマティボディ病院 救急センター、救急病棟見学 Exchange Students によるプレゼンテーション
8月15日(木)	病院見学@Queen Sirikit Medical Center 移植病棟、Special Care Unit 見学 救命チームによるワークショップ
8月16日(金)	マヒドン大学サラヤキャンパス見学 ナコンパトム県訪問
8月17日(土)	自由行動(アユタヤ観光)
8月18日(日)	自由行動(現地の学生とバンコク観光)
8月19日(月)	病院見学@ラマティボディ病院 ICU、CCU 見学 病院見学@Somdech Phra Debaratana Medical Center 透析病棟見学
8月20日(火)	退院計画と栄養サポートについて講義 病院見学@ラマティボディ病院 栄養外来見学
8月21日(水)	ラマティボディ病院における外来看護について講義 ラマティボディ病院における訪問看護について講義 Community Nursing Care Unit 見学 Exchange Students による文化紹介、体験

8月22日(木)	サイアム博物館訪問
8月23日(金)	Thai Traditional and Integrated Medical Hospital 訪問 Farewell Ceremony

2. 目的

参加学生、ラマティボディ病院、看護学生との交流によって、タイ、その他の国のヘルスケア、看護、看護の役割、文化について学び、理解を向上させる。また、タイの文化、社会、言語の理解を促進し、多様な文化や価値観に触れ、国際的な視野を広げる。

3. 活動内容

・1日目(8月13日)

滞在先のホテルに International Relations の先生が迎えにきてくださり、他の大学の学生と看護学部まで向かった。ホテル近くのガソリンスタンドに病院、大学関係者が利用するラマティボディ病院行きの無料シャトルバス乗り場があり、それ以降も毎朝シャトルバスで通学した。

歓迎会、マヒドン大学、ラマティボディ看護学部紹介の後、タイの医療制度について講義を受けた。タイにおける健康に影響する生活行動として、速度超過や危険運転による事故、国境を超えた移民、大気汚染、衣服繊維やプラスチック汚染、危険労働があることを知り、日本とは異なる社会が健康に影響していることが印象に残った。ヘルスプロモーションでは、健康的な生活のための行動促進のためにコミュニティヘルスナースが活躍していることを学んだ。家庭訪問や、地域での教育で減塩や血圧コントロール、乳がん予防運動が行われていることは日本と似ていると感じたが、デング熱予防運動や、地元のバンドと協力していることは今まで聞いたことがなかったため興味深かった。IR チームからは、タイのあいさつ、数字の数え方、食べ物、ショッピングセンターや観光地について教えていただいた。タイ語の発音は日本人にとってイントネーションの違いが難しく聞き取れなかったが、中国語の四声と似ていた。台湾や香港の学生と発音を確かめながら簡単なあいさつを練習した。

・2日目(8月14日)

午前は、ラマティボディ病院の救急外来、救急センターを見学した。初めに患者をレベル1～5に分類したあと、エリアを分けて診察、検査を行うシステムがとられていた。感染が疑われる人との動線が分けられていた。救急センターを見学したのは初めてであったため日本とは比較しにくかったが、指輪カッターが置いてあること、意識がない患者に対して拘束するために点滴ボトルをリサイクルして手作りしていることが印象的だった。日本のミトンなどよりもコストが安く、汚染物が付着しても管理しやすいなどのメリットがあった。器具を再利用していることは、タイの医療現場における環境意識の高さなのかも

しれないと感じた。また、タイの救急車は平均で 10 分～30 分で到着すること、重症の場合 10 分で到着することを学んだ。日本のように救急時に利用される救急車(黄緑色)と患者の送迎用に利用される救急車(白色)の 2 種類があった。

午後は、参加学生による大学紹介と、自分たちの国の医療システムまたは三大死因についてプレゼンテーションが行われた。マヒドン大学の看護学生も聞きにきており、阪大看護の卒業後の進路や、部活動について質問を受けた。



・ 3 日目(8 月 15 日)

午前は移植病棟と **Special Care Unit** を見学した。ラマティボディ病院は 2004 年に東南アジアで初めてロボット腎移植に成功したそうで、腎移植の患者が多いという話を聞いた。移植病棟での看護師は手術前の患者に栄養や薬についての教育、手術後～退院して 3 か月まで LINE や電話を用いて定期的にフォローを行っていた。患者に教育するときにはコントロールするのではなく促すことを意識していることを学んだ。患者向けパンフレットには、感染対策のための健康的で清潔な食べ物について書かれていた。タイは屋台が身近であり、フルーツが豊富であるが、術後の患者は屋台の料理を控え、密閉されたフルーツを選ぶように書かれていることが、タイならではの感じた。**Special Care Unit** は、初め、ICU のように重症患者に対する特別なケアを行う病棟だと思っていたが、日本の特別室のようなイメージの病棟だった。個室には 3 つのグレードがあり、家族が 1 人泊まってもよく、あまりの広さと綺麗さに驚いた。浴室は座ったままシャワーができるような構造で、薬は間違えないように鍵がかかった箱に入れて管理されていた。入院中も患者と家族が快適に過ごせる空間でありながら、治療を適切に行えるように役割が果たされている場所であると感じた。

午後は、救急センターの方に来ていただき、BLS、患者の移送、骨折部位の固定について実習を行った。心臓マッサージと AED は阪大の授業でも行ったことがあるが、救命板に固定させてからの移動は初めてで、適切に固定し、安全に移動させることが難しかった。

た。マヒドンの先生から、「日本では心臓マッサージをしながら歌うんでしょ？」と言われ、「もしもしかめさん」を歌いながら胸骨圧迫を行った。香港ではドラえもんを歌っていると聞いた。



・ 4日目(8月16日)

ラマティボディ病院から約1時間バスにのり、サラヤキャンパスに行った。看護学部1、2年生が勉強するキャンパスで、その他の学部の学生も集まるキャンパスであることから、自然が多くとても広いキャンパスだった。タイは大学にも制服があり、制服を着た学生がキャンパス内の屋台で昼食を買っている様子が日本の大学では見られない光景であり、活気があった。

午後は、サラヤキャンパス近くの蓮池に行った。バナナ、マンゴー、ココナッツの木が至るところに生えており、タイの田舎を見ることができた。蓮池は日差しを遮るものがなくとても暑かったが、とても綺麗な景色だった。転覆しないか緊張しながらボートを漕いだり、魚に餌やりをしたりしながら楽しみ、ここまでの研修やタイでの感想を共有しながら研修前半を締めくくった。



・ 5 日目(8 月 1 7 日)

土曜日は自由行動の日であったため、アユタヤ遺跡に行った。ワット・プラシーサンペット、ワット・マハタート、ワットラチャブラナを観光した。タイの仏教、仏像を崇拝する文化、作法やルールを体験しながら世界遺産を間近に見ることができた。かつてのアユタヤ王朝の華やかな時代が遺跡としてそのまま残っており、タイの歴史や文化を学ぶことができた。また、バス、国鉄など様々な交通に挑戦し、苦戦もしたが良い経験になった。

・ 6 日目(8 月 1 8 日)

日曜日にも自由行動の日であったため、マヒドン大学のバディの学生に 1 日バンコクを案内してもらった。ワットプラケオ、ワットポー、ワットアルンを観光した。金色や色ガラスのモザイクで装飾された絢爛豪華な宮殿や、仏塔が立ち並んでおり、タイの仏教文化のきらびやかな世界を満喫できた。バディの学生に、ラーマヤナという東南アジアで知られている物語を教えてもらった。ワットプラケオでは、ラーマ王子と鬼が戦うストーリーを意識しながら、装飾や建造物を見ることができ、タイの理解を深めながら観光を楽しめた。パーククローン花市場、チャトチャックウィークエンドマーケットにも連れていってもらい、タイの人々の生活や食べ物を見ることができた。タイ最大の花市場がある通りには、たくさん花屋が並び、バラやひまわりの花束がとても安く売られているほか、蓮の花、ジャスミンなどタイらしい花や、寺院や仏像にお供えするための花飾りなどが売られていた。どの場所も移動もバディの学生が案内してくれ、英語でタイのことを教わったり、たくさん話したりすることができた。自分が出会ったタイの学生はみんな英語に慣れている印象で、自分も同じレベルでコミュニケーションができるように今度も英語を積極的に使う環境を作ろうと思った。

・ 7 日目(8 月 1 9 日)

午前ハラマティボディ病院の ICU、CCU を見学した。ICU は手術室の隣にあり、手術後の患者が入っていた。個室になっており、患者を温められるウォームタッチが備わっていたり、肺スパイロメーターがベッド横に置いてあったりして、早期にリハビリが開始できるようになっていた。ICU での薬剤管理は、薬を出す機械があり、薬剤師が 1 日 2 回セットした薬を看護師が 1 個ずつ取り出せるようになっていた。阪大ではこのような機械を見たことがなく、患者の薬が機械から出てくるのは興味深かった。ICU、CCU の看護師は、卒業後 1 年間トレーニングが必要で、その後も 1 年に 2 回試験があり、看護師にもレジデント制度があると聞き、勉強し続けることが必要な仕事だと感じた。

午後は透析病棟を見学した。ここでも看護師は 2 年間の経験のあと特別なコースを受ける必要があると聞いた。患者が透析を受けている間、家族や介護者が横についているようすが見られ、タイでは患者の家族が付き添うことが一般的であることを学んだ。

・ 8 日目(8 月 2 0 日)

午前は、ラマティボディ病院の看護師より、退院計画と在宅栄養について講義を受け、その後、午後にラマティボディ病院の栄養外来で、診察の様子を見学した。家族に対しての教育、トレーニングが必要で、看護師が患者のもとに何度も訪問したり、スマホからビデオがいつでも視聴でき、電話、メール、LINE で看護師に相談できたりする、テレナーシングの体制が整っていた。患者が家族と暮らし続けられることを大事にしており、その人の生活に合わせて在宅栄養が継続できるように工夫されていた。特に、点滴スタンドが使えない家では木にかけている場合があることがタイならではの感覚だと感じた。

・ 9 日目(8 月 2 1 日)

午前は、ラマティボディ病院から徒歩 1 5 分の Soi Suan Ngoen エリアを訪問した。このコミュニティには 13000 人ほどが暮らしており、政府機関や病院が多いエリアで、タイ人だけではなく、カンボジア人やミャンマー人も多く暮らしていると聞いた。4 0 年前に建てられた古い家が多く、小さな部屋が密集しており換気が良くないこと、住民がトイレを共有していることから感染症が広まりやすいことが問題であるとのことだった。コミュニティナースが家を訪問し、退院後の患者を見に行き、すれ違った住民と話しながら見回りをしており、看護師は住民から信頼されていると実感した。

午後は、香港、台湾、インドネシア、日本、タイの学生が集まり文化紹介、体験を行った。手遊び、古くから伝わるダンス、歌、お菓子などを体験することができ、とても盛り上がった。阪大からはおりがみを紹介し、参加した学生にハートを作ってもらった。スムーズに完成できるように、準備を繰り返し、他の大学の日本人に協力してもらった結果、時間内に完成させることができ、予備で持っていった 5 0 枚のおりがみも全部配ったほど好評だった。また、タイの学生を交えたチームでタイの早口言葉を競争したり、学生がお互いにさまざまな言語で自由に手紙を書き合ったりして、より一層学生どうしの距離が縮まり、短い時間であったが現地の学生との交流ができとても貴重な時間を過ごすことができた。



・ 10日目(8月22日)

学校のバスでサイアム博物館を見学した。タイがどのようにできたのかルーツを知った後はタイの文化(食事、服、学校、仏教、ムエタイ)に関する展示を見ることができた。古くからある伝統的なタイを感じられる一方で、現代風のものまであり、タイに来てから見たことや食べたことがあるものなどの説明を受けながら、より理解を深められた。

・ 11日目(8月23日)

午前は、**Thai Traditional and Integrated Medical Hospital** を訪問した。ここでは、ハーブや植物を使った薬やマッサージが行われており、病院に入ると、漢方のような独特の匂いが広がっていた。ここでのマッサージは一般的なタイマッサージとは違い、スタッフは証明書が必要であり、リラックスではなく治療目的ということを知った。病院の上の階に植物の標本が作られ、アルファベット順に並べられ、下の階で患者に使用され効果を見て、症状確認や血液検査が行われていた。西洋医学ではできないときに、患者のリハビリや、エンドオブライフとして緩和ケアを行なっていることが印象的だった。

午後は、**Farewell Ceremony** が行われた。証明書、記念品を一人ずつ渡していただき、学生によるスピーチを行った。約2週間の感謝や思い出が話され、大変充実したマヒドン大学での研修が終わることを実感し、学生や先生との別れが惜しかった。プレゼントを交換し合ったり、写真を撮ったりしながら時間を過ごし最後の時間まで楽しんだ。



4. 成果

マヒドン大学ラマティボディ看護学部での研修を通じて、タイの医療システムや看護の実践についての理解を深めることができた。そして異なる文化や社会的背景を持つ学生との交流を通じて、自分の価値観を見つめ直し、国際的な視野を広げることができた。

ラマティボディ病院での見学や講義では、タイの医療現場での工夫や課題を学んだ。環境意識の高い器具の再利用や、患者ひとりひとりに特化した療養環境の整備など、阪大病

院の実習では見られなかったことを知ることができた。これらは、今後の学習や実践にも大きく役立つと感じている。また、看護師の継続的な学習やトレーニングが求められていることを実感し、自分自身も専門知識を深め続ける必要性を強く感じた。そして、看護の役割や責任についての理解が深まった。特に、患者の生活や文化に合わせたケアの提供が求められる場面を多く目にし、看護のアプローチは国や地域で異なるものの、「患者中心のケア」の重要性は共通していると再確認した。今回の経験は、今後の自分にとっての成長や思考に大いに役立つと感じている。

さらに、異文化理解の重要性を学ぶ機会になった。現地の学生との交流や共同作業を通じて、異なる文化や言語を乗り越えながら協力し、何かを成し遂げる楽しさを味わうことができた。この研修では、マヒドン大学、香港、台湾、インドネシアの学生と学ぶことができ、何度も助けってもらったり、教えてもらったり、活動したりすることで、国際的なネットワークを構築できたことも大きな成果であった。

5. 今後の抱負

今後も学び続ける姿勢を大切にしたい。国際的な視野をさらに広げるために、英語や他の言語の勉強に積極的に取り組み、異なる文化や社会を理解するための機会を増やしたいと思う。また、今回の研修で築いたマヒドン大学の方々、学生どうしのつながりを大切に、これらの国際的なネットワークを活用して、看護の分野で少しでも誰かに貢献できるよう努力を重ねたい。この貴重な経験を基に、看護に関わる人間として成長し続けたい。

6. 謝辞

今回の **Student Exchange Program** では、多くの皆さまのご支援のおかげで、大変有意義な2週間を過ごすことができました。

まず、マヒドン大学ラマティボディ看護学部の先生方には、受け入れからタイ滞在中、大変お世話になりました。ラマティボディ病院の看護師、スタッフの皆さまには、親切にたくさんのことを教えていただきました。マヒドン大学のバディ、学生にはタイの文化や習慣について教えていただき、交流を深める機会を提供していただきました。さらに、香港大学、国立台湾大学、台北医科大学、ガジャ・マダ大学(インドネシア)、聖路加国際大学の学生のおかげで日々多くの刺激を受け、貴重な学びを得ることができました。

最後になりましたが、岸本国際奨学金に採択していただいた岸本忠三先生、ならびに関係者の皆さまに、心から感謝を申し上げます。

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部保健科	4 年	学籍番号：*****	氏名：O・M
--------	-----	------------	--------

渡航先国：タイ
受入機関名：マヒドン大学 ラマティボディ看護学部
渡航先機関での受入期間： 令和 6 年 8 月 13 日 ～ 令和 6 年 8 月 23 日 (11 日間)

① 活動概要

日時	活動内容
8 月 12 日 (月)	バンコクに到着後、バディと一緒にホテルに向う
8 月 13 日 (火)	①マヒドン大学紹介、ラマティボディ病院医学科、 ラマティボディ病院看護学部の紹介 ②タイの健康と医療政策についての講義とディスカッション ③研修におけるオリエンテーション
8 月 14 日 (水)	①救急コールセンター、救急医療オペレーションチームの見学 ②救急病棟、観察病棟の見学 ③大学紹介・医療システム・三大疾患プレゼンテーション発表会
8 月 15 日 (木)	①ラマティボディ病院についての講義 ②臓器移植病棟・個室病棟の見学 ③BLC・移送・応急処置のワークショップ
8 月 16 日 (金)	①サラヤキャンパスツアー ②キャンパス周辺の観光
8 月 17 日 (土)	アユタヤ遺跡観光
8 月 18 日 (日)	三大寺院観光
8 月 19 日 (月)	①ICU・CCU 見学 ②CBU 見学
8 月 20 日 (火)	①退院計画と継続的な食事療法支援についての講義 ②緩和ケア病棟の見学
8 月 21 日 (水)	①Home health care unit, Community Nursing care unit の講義 ②Home health care unit, Community Nursing care unit の見学 ③文化交流

8 月 22 日 (木)	①サイアム博物館見学
8 月 23 日 (金)	①タイの伝統的統合医療病院の見学 ②研修終了セレモニー
8 月 24 日 (土)	マヒドン大学ワナ教授との会食、 マヒドン大学の院生と観光 帰国

② 目的

タイの伝統的・統合的医療を実践している病院の訪問・見学や、アジアの国々の看護学生との交流・ディスカッションを通して、タイの医療の特徴や、国際医療について学び理解を深める。

③ 活動内容

【8 月 13 日 (火)】

①マヒドン大学、ラマティボディ病院医学科、ラマティボディ病院看護学部を紹介

それぞれの紹介動画を視聴した。マヒドン大学は 6 つのキャンパスを持ち、医療実践、研究、開発を通じてタイの医療を支えている。大学では、医学生や看護学生を含むさまざまな医療分野の学生が交流し、学びを深めている。また、各国の大学と提携し、留学生の受け入れや国際共同研究などの国際交流も盛んに行われている。

②タイの健康と医療・政策についての講義とディスカッション

タイの健康課題や現状についての講義を受け、各国の学生が自国と比較しながらディスカッションを行った。タイでは、2002 年からユニバーサルヘルスカバレッジ (UHC) が導入され、国民が基本的な医療サービスに平等にアクセスできるシステムが構築されている。しかし、私立と公立の医療機関・保険制度には違いがあり、サービスの質に差が生じている。日本では、医療保険制度に違いはなく、高品質な医療が比較的低額で国民に提供されているが、高齢化に伴う医療費の増大が大きな課題となっている。異なる問題を抱える国の医療制度について学ぶことで、知見を広げ、自国の制度を客観的に捉える機会となった。

③研修におけるオリエンテーション

タイ語での挨拶や数の数え方、おすすめの料理や観光地の紹介があった。

【8 月 14 日 (水)】

①救急コールセンター、救急オペレーションチームの見学

タイには、患者を医療機関に搬送するための救急車と、緊急度の高い患者に適切な医療措置を施して搬送できる救急車の 2 種類がある。前者は救命士のみが乗車し、後者には医

師が乗車している。また、タイの交通量・渋滞の多さに対応するため、医師がバイクを使って現場に向かう工夫もされている。これにより、救急車よりも早く患者のもとに到着できる。この救急車の使い分けは、コールセンターが患者の病態を聴取し、5段階に分類して決定している。日本では、不必要に救急車を利用することで不足が生じる問題があるが、タイのように搬送用と処置用を分けるアイデアが得られた。

②救急病棟、観察病棟の見学

救急病棟では、多くの患者がパーテーションのない開放的な場所でベッド上に横たわっていた。観察病棟には、酸素吸入が必要な患者の部屋が二つと、不要な患者の部屋が一つあった。看護師によると、患者の中には2週間滞在する者もいるという。これは一般病棟が満室であるためだ。日本の救急病棟とは雰囲気が異なり、多数の患者を受け入れるための工夫が見られたが、プライバシーの保護や患者の安楽を考慮する必要性も感じた。

③大学紹介・医療システム・三大疾患プレゼンテーション発表会

各大学が用意したプレゼンテーションを発表し、意見交換を行った。特に印象に残ったのは、各大学のトレーニング施設である。多くの大学が人形を使った看護技術のシミュレーションを行っており、技術習得法として有意義だと感じた。また、医療システムにおいては、医療保険制度に違いがあった。特に印象に残ったのは、インドネシアの保険料支払いが遅れる、または忘れる住民がいるという問題だ。日本は医療保険制度が整っているため、医療保険費の増大が大きな問題であるが、国によっては制度の運営自体に問題があることも学んだ。

【8月15日（木）】

①ラマティボディ病院についての講義

ラマティボディ病院はベッド数が1000床を超える大規模な病院であり、タイを代表する医療機関である。タイ王室によって設立され、マヒドン大学と連携し、現代医療の教育、研究、臨床サービスの拠点として機能している。2289名の看護師と1507名の看護助手が在籍し、142のユニットに分かれて看護が展開されている。特に心臓病、がん、精神疾患の治療で国際的な評価を得ており、質の高い医療・看護ケアを自国のみならず周辺国にも提供している。東南アジア全体に影響を与える医療機関である。大阪大学と比較すると、国際性の高さや臨床研究への貢献が共通している一方で、医療システムや資源においてはラマティボディ病院が一部制限を受けている。これは、公共医療保険制度による予算の制約や公共病院の負担増加が要因である。ラマティボディ病院はタイの医療システムにおいて不可欠な存在であり、医療提供と臨床研究において重要な役割を果たしているが、日本の主要な病院と比べると、医療システムや資源において制約があることを学んだ。

②移植手術病棟・個室病棟の見学

移植手術病棟では、手術直後の患者、状態が安定した患者、感染を起こした患者が入る病棟に分かれていた。手術直後の患者が入る病棟には医療者以外立ち入ることができず、食事も厨房で作られてから 15 分以内に届けられる仕組みで、厳重な感染対策が行われていた。個室病棟では、リビングと寝室が分かれている病室を見学した。一般の個室病棟との違いは料金であり、入院費は高いが広い病室で充実したサービスが提供され、患者が快適な生活を送れるよう工夫されていた。また、明るいテラスがあり、入院患者がストレスなく生活できるような環境が整っていた。

③BLS・移送・応急処置のワークショップ

それぞれのコーナーを 30 分ずつ体験した。BLS の手順や注意点は、日本で一般的に実施されているものと同じだったが、日本では市民が積極的に行うことを推奨しているのに対し、タイではライセンスを持った人が行うことを推奨していた。また、タイでは交通量が多く、救急隊員が到着するまでに 1 時間かかることがあるとの話もあった。市民が積極的に行えないことが、BLS において課題だと感じた。移送については初めての体験で、頭部を固定する器具の使い方や、固定の方法、ボードへの移動から運搬まで新しい技術を学ぶことができた。応急処置では、空気を抜いて硬化させて患部を固定する器具や、止血に使う器具、骨折した腕の吊り方を学んだ。これらも初めての体験であり、新しい技術を習得することができた。

【8 月 16 日 (金)】

①サラヤキャンパスツアー

サラヤキャンパスは、全学生が 1 年次に学ぶ校舎であるとともに、テクノロジーや社会人間科学、歯学などさまざまな分野が揃っている。緑豊かな自然に囲まれたキャンパスで、敷地内には音楽ホールもある。キャンパス内の博物館では、マヒドン大学の歴史を学ぶことができた。王室によって設立され、医療の発展が国民の健康と生活を守るという使命のもと、タイの医療を発展させ続けてきた大学であることを学んだ。また、多くのカフェテリアがあり、金曜日にはフードマーケットが開催され、学生たちで賑わっている様子を見ることができた。

②キャンパス周辺の観光

マンゴーやココナッツの畑が広がる地域で、大きな池を訪れた。自然豊かな場所で、魚に餌をあげたり、ボートで池を散策したりした。また、餅米を潰して天日干しにしたものを揚げたお菓子の作り方を学んだ。香辛料の効いたソースを付けて食べるのがおすすめで、地元の味を楽しむことができた。

【8月17日（土）】

アユタヤ遺跡

世界遺産の一つであるアユタヤ遺跡を巡った。アユタヤ遺跡は、1350年から1767年まで続いたアユタヤ王朝の遺跡群で、かつて東南アジアの貿易と文化の中心地であり、壮大な寺院や宮殿が建てられた。ビルマ軍の侵攻によって1767年に破壊されたが、現在もその建築物の一部が残っている。特に、ワット・プラシーサンペットやワット・マハタート、荘厳な造りと木の中に埋もれた石像の顔が歴史を感じさせ、非常に魅力的だった。

【8月18日（日）】

三大寺院観光

三大寺院であるワット・プラケオ、ワット・ポー、ワット・アルンを巡った。日本の寺院とは異なる華やかな彩りと装飾が印象的だった。また、ワット・アルンではタイの民族衣装を着て観光でき、タイの文化を存分に味わうことができた。この日はマヒドン大学の学生が寺院を案内してくれ、タイの文化や美味しい食べ物、歴史についてさまざまな話を聞き、交流を深めることができた。

【8月19日（月）】

①ICU・CCUの見学

ICU・CCUはそれぞれ8床と6床で、すべて個室だった。看護体制は1対1と手厚い。訪問時は満床状態だった。特に印象に残ったのは以下の二点である。一つ目は、ICUやCCUの看護師が専門的にこの分野を学ぶことである。大学を卒業後、ICUやCCUにて1年間学び、その後臨床経験を積む。他の一般病棟の看護師とは完全に分けられていることが特徴的だ。二つ目は、治療の相互作用を確認するシートである。薬品や治療を同時に使用することで、副作用や負の効果が生じる可能性があり、それを一覧表にまとめ、誰でも確認できるようになっていた。多くの治療の相互作用を考慮するのは困難であり、一目で分かる表を用いることで誤りを減らせると感じた。

②BCUの見学

BCUとは、心臓血管疾患に特化した重症患者病棟である。心臓カテーテルなどの手術を終えた患者が運ばれ、病態の回復を図る。こちらもICUと同様、個室で1対1の看護が実施されており、手厚いケアが提供されていた。ここでは、病棟看護師の仕事として、毎日センサーや電気ショック器機の点検が行われていた。これにより、いつでも誰でも使用できるように工夫されていた。重症患者病棟の看護師は、機器の仕組みや周術期看護、循環器疾患の知識など、多くの知識を習得する必要があることを学んだ。

【8月20日（火）】

①退院計画と継続的な食事療法支援についての講義

ラマティボディ病院では、2018 年から退院指導および食事療法支援が始まった。NST は医師、看護師、薬剤師で構成されている。サービスは主に四つの段階に分かれていた。一つ目は、退院する 5～7 日前から行う退院計画である。パンフレットを用いたり、自宅で使用する医療器具を渡して使い方を説明したりして、退院後の生活に備える段階である。二つ目は、退院後 1～3 日後に行われる自宅訪問で、実際に自宅でケアを継続できるか確認する段階である。三つ目は、家庭訪問に合わせて不足している知識や技術を補う段階である。最後に、電話による不安や悩みへの対応である。これらのサービスは患者だけでなく、ケアを担当する人物や家族も対象としている。患者が自宅に帰る際、家族やケアを担当する人の教育も重要であり、悩みや負担をいつでも打ち明けられる支援体制が魅力的かつ重要だと感じた。

②緩和ケア病棟見学

緩和ケア病棟は 7 年前に設立された新しい病棟で、6 床の相部屋のみである。病室は温かみのあるオレンジ色のライトや木目の家具を使用し、病院の暗い雰囲気を払拭する工夫がされていた。患者は終末期と治療を終えようとしている方の 2 種類に分かれていた。どちらの場合も、苦痛を緩和するケアが重要である。また、患者やその家族が最期の時まで納得のいく選択ができるよう、訴えを受け入れ寄り添うことも緩和ケアにおいて重要だと学んだ。さらに、タイは信仰の深い仏教徒が多く、スピリチュアルな面において仏教が関係していた。日本では治療に宗教的な要素が取り入れられることは少なく、タイならではのケアを学ぶことができた。

【8 月 21 日（水）】

①訪問看護・地域看護の講義

訪問看護は 1972 年に小児看護領域から始まり、1974 年には 8 領域に展開され、現在まで続いている。利用者は 75～80 歳が最も多い。訪問看護の目的は、患者が住み慣れた自宅で療養し、QOL を向上させることであり、退院指導から始まり、教育や自宅に戻った後のフォローを含め、長期的に在宅療養患者のケアに取り組んでいた。また、チームには救急病棟の医療者も含まれており、自宅での急な状態の悪化にも対応できる。日本では訪問看護ステーションがこの役割を担っているが、ラマティボディ病院のような大規模なクリティカルケア病院が担うことは新鮮だった。しかし、大病院だからこそ、救急病棟の医療者をチームに加えることができるなどのメリットもあると感じた。

地域看護は 2006 年に始まり、2019 年からは 8 地域を担当している。ラマティボディ病院の地域看護の特徴は、看護学生がケアに参加していることである。地域での健康推進プログラムや健康測定会、住民の教育などに学生も参加しており、学生時代から地域住民を支える健康支援を学ぶことができる。マヒドン大学の学生が関わることで、地域コミュニ

ティに住む住民の健康データを得ることができ、これにより住民の健康状態を分析・研究することができる。地域看護の目標は、地域住民の健康増進や健康教育に加え、学術的な研究を行い健康増進に貢献することであり、マヒドン大学と連携するラマティボディ病院の強みであると感じた。

②訪問看護ユニット・地域看護ユニットの見学

訪問看護ユニットでは、訪問に持参する道具や、技術習得に使用する患者モデル人形などを見学した。訪問看護では、患者の自宅という医療道具が限られた環境でケアを行う必要がある。そのため、傷のケアや栄養注射、バイタルサインの測定に使用する用具を一式揃えて訪問に向かっていった。また、アプリを使用して在宅で医療技術を YouTube で視聴できるシステムもあり、このアプリは患者やケアを行う家族が正しい手順を習得するのに効果的だと感じた。

地域看護ユニットでは、実際に患者の自宅を訪問した。訪問した 2 名はいずれも糖尿病のコントロールがうまくいかず、足に障害を抱えていた。コミュニティには、元看護師で患者たちにケアを提供する仕事をしている女性がいた。その女性がケアを担当している患者の中には、独居で歩行が困難なため病院に行くことができない者もいた。このため、コミュニティ内にケアを提供する人がいることが、この地域の住民にとって非常に重要であると感じた。

③文化交流

日本、台湾、香港、インドネシアの学生がそれぞれ自国の文化や特色を、プレゼンテーションやアクティビティを通じて共有し合った。私たちは、折り紙でハートを折るアクティビティを実施した。留学生はもちろん、ラマティボディの看護学生たちも折り紙に大変興味を示し、楽しんでくれた。また、各国の特色や文化を学ぶと同時に、多くの学生たちと交流を深めることができた。

【8月22日（木）】

①サイアム博物館見学

サイアム博物館で、古代から現代までの変遷を表現した展示を通じてタイの歴史を学んだ。また、プロジェクションマッピングを用いた伝統料理の紹介や、動画や体験を通じた文化の紹介もあり、子どもでも楽しめるように工夫された分かりやすい展示で、タイの歴史を身近に感じることができた。

【8月23日（金）】

①タイの伝統的統合医療病院の見学

タイの伝統的統合医療病院は、クリティカルケアを専門とする病院とは異なる役割を果

たしている。ハーブを調合した薬やマッサージ、ハリ治療といったタイの伝統医療を実践し、苦痛の緩和を主な目的としている。これらの医療の需要は近年増加しており、タイ各地に同様の病院が複数存在している。伝統的治療法は西洋医学に比べて副作用が少なく、苦痛が少ないことが特徴である。緩和ケアの一環として、これらの医療を選択できることは、患者の QOL 向上につながると感じた。

②研修終了セレモニー

2 週間の学びや感謝の気持ちをスピーチとして発表し合った。この 2 週間でタイの医療保険システムやラマティボディ病院、またタイの文化や伝統について知見を広げることができた。また、他国の学生たちとの交流を通じて、タイ以外の国々についても多くのことを学んだ。さらに、学習だけでなく、かけがえのない仲間を作ることができた。

【8 月 24 日（土）】

7 月に大阪大学を訪問していたワナ教授と一緒に昼食をとった。タイ料理の有名店でパッタイやトムヤムクン、スティッキーライスといったタイ料理を楽しんだ。また、今回の研修で学んだことや各大学・国について情報を共有し、有意義な時間を過ごすことができた。その後、マヒドン大学の院生に ICONSIAM という大型ショッピングセンターを案内してもらった。院生たちとは日本のポップミュージックの話で盛り上がり、以前大阪大学を訪問していた先生や学生たちと再び交流し、親交を深めることができた。

④まとめ

今回の研修では、タイの医療制度や病院制度、文化や人々の暮らしについて学び、日本と比較することで自国の制度や文化を客観的に見つめ直し、お互いの利点や課題を考えることができた。タイでは公的な保険を使うことで低額で医療を受けられる制度が整っており、地域コミュニティにまで医療を行き届かせる工夫がされている。ラマティボディ病院のような公的病院は、低額で質の高い医療を提供している。一方、所得や生活環境は地域によって大きく異なり、医療の質や量に不均衡が見られる。日本では、質の高い医療サービスが保険によって比較的低額で提供されているが、高齢化に伴う医療費の増大が国の財政を圧迫していることが課題である。異なる強みと課題を抱える国同士だからこそ、交流を通じて多くのことを学ぶことができたと感じる。また、アカデミックな部分だけでなく、マヒドン大学の学生や先生方、各国の学生たちとの交流を通じて、自身のコミュニティの輪を広げることができた。

⑤今後の抱負と謝辞

今回の研修では、タイの医療制度やラマティボディ病院の設備・制度について多くのことを学んだ。また、各国の学生たちとの意見交換を通じて、インドネシアや香港、台湾の

医療制度や病院についても学ぶことができた。一方、日本の現状について問いかけられた際、十分に答えることができなかったことが反省点である。これは、日本の医療制度や自分の病院に対する理解が不十分だったためだ。今後は、日本の医療や病院制度についてさらに理解を深め、この研修で学んだことと比較し、制度のあり方について考えていきたいと思う。最後に、このような貴重な経験を積む機会を与えてくださった岸本忠三大阪大学名誉教授に感謝申し上げます。今後はこの研修での経験を活かし、自分の成長の糧とできるよう尽力いたします。また、マヒドン大学、大阪大学の先生方を始め、研修を受け入れて下さった病院の皆様にも大変お世話になりました。ご支援ありがとうございました。